

中谷ミチコさん インタビュー1

—今回「美術の中のかたち—手で見る造形」に参加の依頼があったとき、どのように感じられましたか。

自分に何ができるのか長い時間考えました。私自身、普段粘土を触って手で作っているので、視覚だけで鑑賞される展示と比べると、作っている人間と鑑賞者の距離が近くなるような、制作中も鑑賞者がすぐ側にいるような感覚がありました。ここまで鑑賞者の事を考えながら作ったのは初めてかもしれません。



中谷ミチコさん インタビュー2

—初期の作品では、レリーフの表現を制作されていましたが、現在のような凹凸が反転した彫刻の表現に変わったのは何かきっかけはあったのでしょうか。

レリーフを作っていた時に、内側に透明の樹脂を入れてみました。樹脂が透明なので、内部が覗き込めて、見え方がなんだか気持ちわるいと思ってそのまま半年くらいアトリエの隅に置いておいたのですが、たまたま遊びに来た友人が「これ凄くない？」と見つけてくれました。そこからやっぱり気になって、気持ち悪さを確かめるために何度も作っていく中で作品になっていきました。



中谷ミチコさん インタビュー3

—「影、魚を寝かしつける」詩的なタイトルで印象的です。中谷さんにとって、寝かしつけるというのはどのような意味を持つのでしょうか。

私には娘がいるのですが、小さい頃は寝かしつけが大きな日課でした。寝かしつけるというのはなかなか難しく、相手のリズムを読み取って、自分自身を完全に寄り添わせるというか、。寝る人はだんだん無防備になっていくので、緊張を吸収していく様な、非対称であると同時に、一つになって包まれていく感覚もあったり、逆に失敗してものすごいエネルギーを相手が爆発させたりする。有機的で不思議な関係性だなと思っていました。



中谷ミチコさん インタビュー4

ー作品のモチーフに複数の少女たちが登場しています。何か物語があるのでしょうか。

実は一環したストーリーはなくて、一個ずつが重なりあっていく中で物語が生まれていくように制作しています。たくさん的人が影響したり、しあわなかったりして、展開はしていますが、終わりも始まりも生み出さないよう、一つ一つの主人公たちを丁寧に存在させていくように作品を組み立てています。



中谷ミチコさん インタビュー5

—今回の作品は大きく弧を描いています。
円形にされた理由がありましたら教えてください。

壁やキャンヴァスには描く範囲に終わりがあるって、ある種、表現空間の終わりが設定されています。彫刻において空間の終わりというのは、彫刻だけで決定できる問題ではなく、部屋やそのモノが置かれた場所が終わりを規定する可能性があります。私は永遠に続いていくような彫刻空間を作りたくて、レリーフを制作し、白い平面（ここで言う白い壁）を可能な限り広げたいと考えています。なので、壁の終わり、つまり部屋の角をなくしてゆきたいという欲求がずっとあります。できる限り視覚の中に縁を作らないくらいの大きさにこだわりました。それから、石膏の支持体を自立させる構造も重要な要素でした。

